

国家・民族・人種

―新しい歴史を教える視点とは―

藤沢総合高校 石橋 功

はじめに

日本史の必修科目化は、言うまでもなく「日本人なのに日本のことを知らない高校生がいる」、「自分の国の歴史を学ぶべき」というような大きな声が世間の耳目を引きつけ、意図的な主張に流された政治決定であることは疑いがなく、意図的な主張に流されたので、必修になった日本史を、すでに必修の世界史の視点からあらためて見なおし、比較してみたい。これは「日本史とは何なのか、日本とは何なのか、日本史で何を教えるべきなのか」を再検証する絶好の機会でもある。

これまでの世界史教育では、有史以来フランスやドイツやイタリアという場所が前提としてあって、そこに元々フランス人やドイツ人やイタリア人が住んでいて、その人たちが統一国家を造る、という歴史的展開をなぞることがいわば柱であった。ところが今では、フランス革命で国民国家フランスが始まり、ドイツ統一は一八七一年、イタリアの統一は一八六一年で、ここでやっと国民国家ドイツやイタリアが誕生、ということを中心とするように変化した。歴史学が国民作りに奉仕するという役割をようやく捨て去り、科学的な実証に基づく歴史教育が歴史的事実をもとに形成されるようになったからである。

振り返って「日本史」を見てみると、「いつ日本が形成されたか」

「日本に主権国家はいつ成立したか」「国民国家がいつ成立したか」への歴史学的検証の視点が捨象されたまま成り立ってきた。歴史的に見て「日本」と「日本人」は有史以来存在していた、などになんら疑いを持たないで日本史必修化がなされることは、ある意味で歴史教育の危機であろう。

国民国家とは

国民国家は近代以降にヨーロッパで誕生した。近世にヨーロッパで画定された国境線により区切られた一定の領域を有し、主権を持つに至った国家がもととなり、その領域に住む人たちが、「国民」としての一体性の意識を共有するようになった政治単位のことである。「国民は共通な言語を持ち、共通の文化があり、共通な価値観を持つ」。こういった極めて近代的なことを、あたかも有史以来あったように描く歴史が「一国史」として一九世紀にヨーロッパで成立し、それが学校教育を通じて、各国史として認識されるようになり、「フランス人」「ドイツ人」「イタリア人」が生まれてくるようになった。

ここに「十字架と三色旗」（谷川稔著 山川出版社）という本がある。フランスの近代国民国家形成にとってフランス革命が出発点であること、独仏戦争敗北後の第三共和政下でナショナリズムの確立に向けてどのような手法がとられたかを、教育を中心についていかに描かれている。またフランス革命の最大の革命性は、日常的に王権を支え続けたカトリック教会に対する文化革命にあったこと、カトリックが独占していた教育を国家が継承したこと、その目的はよきフランスの公民をつくることであって、国民教育はフランス革命

にさかのぼるといふ重要な指摘で結んでいる。

フランス革命の教育部分を担当したコンドルセは、教会権力から教育を切り離し、宗教教育を公教育から排除するというきわめて近代的な教育施策を提唱した。この教育改革はナポレオン帝政下では後退した。しかしナポレオン体制下においても、ジャンヌ・ダルクをフランスの救国者としてたたえるというようにフランスのナショナリズムは進んでいた。

フランスのナショナリズムに火がつくのは、普仏戦争敗北後の第三共和政時代であった。教会から公教育を国家が取り上げフランス国民を形成するためのフェリー法が一八八二年に議会を通過し、無償・義務・世俗化という近代公教育がフランスで成立した。公教育の学校では、ラテン語ではなく共通のフランス語が、そして古代からフランスがガリアとして存在してきたとする「フランス史」が教えられ、ジャンヌ・ダルクは国民の英雄になっていくのである。

以上のような主張を読んだ時、フランス革命は世界に先駆けて自由と平等を獲得し完成したブルジョワ革命であるという認識に馴れているわれわれ日本人としては、革命の評価に大きな変化を要求される。なにしろカトリック教会は宗教改革以降勢力を後退させ、代わって絶対主義の時代は王が強大な権力をもつようになり、その王と結びついた貴族・聖職者をブルジョワが都市民衆とともに打倒するのがフランス革命であった、という理解のしかただったからである。

実はこのようなフランス革命理解は、第三共和政下で造られたものであり、日本ではマルクス主義的歴史観が強い時期に、フランス以上に真剣に受け止めてきた。その結果、多くの世界史教師たちが

フランス革命に長い時間をとって情熱的に革命を語り、フランスに憧憬れる生徒を養成してきた。しかしソ連解体によってマルクス主義歴史理論がその有効性を失うと、フランス革命を修正主義的に見るのが歴史学の主流となり、上記のような本が生まれてくるに至ったのである。

国民国家形成のプロセスはドイツも同様である。現在もバイエルン王国主体の南ドイツとプロイセン王国主体の北ドイツは政治的に相反する部分が明白だが、それでも一九世紀末に統一され、ここから国民国家ドイツが造られてゆく。統一ドイツ文化を支えたのはグリム兄弟である。彼らによるドイツ語辞典は現在のドイツ語の基本文献になっているし、彼らが蒐集した「固有の民話」であるグリム童話はドイツ人の根本的心性をあらわしたものと理解されてきた。ただし近年の研究ではフランスのペロー童話集からの借用もかなりあったらしく、「固有の民話」には疑問符がつくようであるが。

イタリアでもプロセスは同様であった。一八六一年のイタリア王国成立時には、後にイタリア語となるトスカナ語はイタリア人の約3%しかしゃべれなかったことなど、統一イタリア、国民国家イタリアが近代のたまものであることを象徴している。

ここではこれ以上ふれないが、イギリスもアメリカ合衆国もロシアは同時期の日本にもあてはまる。明治維新は一八六八年、イタリアの統一は一八六一年、ドイツの統一は一八七一年、フランスのフェリー法成立は一八八二年であることを考えると、日本の近代化Ⅱ国民国家形成とするならば、欧米に遅れていたとはとても言えない。日本は「鎖国」ゆえに欧米から遅れたという図式は、「産業革命」

開始時期以外の部分ではあてはまらないであろう。

民族とは？

欧米のナショナリズムが一九世紀に広がると、NATIONには「国民」という意味に「民族」という意味が付加されていくようになる。

「一民族＝一国家」に基づく民族自決という風潮がヨーロッパをおおい、二〇世紀になると世界中に広まる。ドイツ人がゲルマン民族から形成され、イギリス人がアングロ＝サクソン族から形成され、フランス人はフランク族から形成されたといった具合に、ローマ帝国末期のゲルマン人移動を極めて大きく評価し、そこに「国民国家」の原点の「民族」を持つてきた。

日本にあつては「古モンゴロイド」縄文人と「新モンゴロイド」弥生人が混血して現在の「日本人」が形成された、というのが「日本史」の通説となっている。この「日本人」は、大陸に住む「朝鮮人」や「中国人」とは切り離され、古代から日本に住み続けたとされる。現行指導要領でも「我が国における国家の形成」を大和朝廷の成立におき、古代の日本と現在の日本を直線的につなげている。もちろん大和朝廷の日本人と今の日本人は共通の日本人なのである。

こうした「民族」概念の裏側には「人種」概念が存在する。見た目も同じ人々が、宗教によってドイツ人とユダヤ人にわけられ、「人種の違い」を理由としてホロコーストが行われた二〇世紀の歴史をわれわれは持っている。

「国民＝民族＝人種」という非科学的な概念は、二〇世紀終了とと

もに学問からは過ぎ去った。しかし現実を振り返れば、一般大衆のなかには根強くこの見方が残り続けている。政治家のうっかり発言は後を絶たないが、その根幹にはそれが明らかに存在していることが分かる。歴史学では消えた非科学的な見方は、歴史教育ではいまだに消えていないのである。

「人種」とは？

人種について教科書の記述は以下のようになっている。

「日本人の原型はこうしたアジア大陸南部の古モンゴロイド（蒙古人種）にあり、その後の弥生時代以降に渡来した新モンゴロイドとの混血を繰り返して、現在の日本人が形成された」（山川出版・詳説日本史）

「人種は、皮膚の色や毛髪の色や形といった身体的特徴に基づく分類でモンゴロイド・コーカソイド・ネグロイドに分けられる。」

（二宮書店・地理B）

「人種は皮膚の色や骨格など、遺伝的な特徴による生物学的な分類に基づくもので、普通ネグロイド、コーカソイド、モンゴロイドの三大分類が一般的である」（桐原書店・政治経済）

「人種による分類とは、身長・頭の形・皮膚の色・毛髪といった身体の特徴によって、人類をわけようとする考え方である。このような人種の違いを優劣と結びつける考えは、一九世紀以来欧米でさかんになった。しかし今日では、人類を人種によって分類したり、人種間に優劣の差があると考えることには科学的根拠がないとされている。」（山川出版・詳説世界史B）

山川の詳説世界史はある意味スタンダードであるが、地理、政治

経済では「人種」の記載はこの程度に減っている。だが日本史の教科書は前述した山川の詳説日本史のような記述がほとんどで、人種由来の日本人論をそのまま記している。この背景にあるのは、国家としての日本は古代からあること、それを形成した日本人とは他と区別した日本人でなくては困るという事情である。

なぜ「人種」が日本史以外の教科書から消えようとしているのか。世界史の教科書の記述どおりなのであるがすこし詳しく見てみよう。

二〇世紀末まで、人類の進化の説明は「他地域進化説」が主流であった。この説に依れば、わがモンゴロイドは北京原人が進化した後裔であり、ネアンデルタール人がヨーロッパ人に進化し、ジャワ原人がオーストラリア原住民に進化したとされる。この説に従えば「人種」というものがあり、地域によって様々な「人種」が存在することになる。

ところが最近では人類の「アフリカ単一起源説」が有力になっている。これは現代人すべてに共通する太古の母親は20万年前のアフリカにいた女性であったとされる。これが正しいならば、「人種」なるものの存在は否定される。「アフリカ単一起源説」が主流になり広まることで「人種概念」が教科書等から姿を消していったようだ。

「人種」という概念を否定する人種差別撤廃条約（一九六五年）を早くから批准した欧米では、「RACE（人種）」という概念を用いる人々を「RACIST」と呼ぶ。すなわち日本語に訳せば人種差別主義者のことである。ちなみに日本がこの条約を批准したのはようやく一九九六年であり、批准の遅れかたを見ると、「人種」

概念が日本では今もまだ生き残っているようである。

「西洋科学は大航海時代以降、西洋とオリエント、植民者と被植民者、白人と有色人種といった二項対立的な図式が現在明らかになり、他者をつくるプロセスに『人種論』が決定的な役割を果たした」（「歴史の中の差別」 日本経済評論社 貴堂嘉之著）

以上のような西洋中心の歴史の見方の中に「非科学的なもの」が多く含まれていたことを指摘することも歴史教育の重要な役割のようである。

日本人とは？

「私たちのルーツは大陸の広い地域に散らばっており、それがさまざまな時代にさまざまなルートを経由してこの日本列島に到達し融合していくことによって日本人が成立したことは明らかです」「私たちはしばしば国の成立と集団としての日本人の成立をおなじものと見なすことがあります、このように見れば両者は分けて考えるべきものであるとわかります。」（「日本人になった祖先たち」 NHKブックス 篠田謙一著）

最新のDNA分析から見えてきたのは現段階では以上のような結論であるらしい。その意味では日本史教科書に書かれているような「日本人」の「日本史」はかなり無理のある理論のようである。明治以来、国民国家日本建設のためにつくられた日本史は朝鮮・中国とは歴史的に乖離させた歴史を作り上げてきた。第二次大戦以降もこのような「一国史」が残った背景には、朝鮮や中国で見られるようなナショナリズムの必要性というバックグラウンドのもと、他国とは異なるナショナルヒストリーを造り上げたことと見ることができよ

う。我が日本史も例外ではなかったようである。

アルザス・ロレーヌがドイツであるかフランスであるかをめぐって、ドイツとフランスは近代以降、普仏戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦と三度の大きな戦争を行った。フランスの作家ドーデの「最後の授業」を読むと、アルザス・ロレーヌの人が日常的にフランス語を話しているような錯覚にとらわれるが、アルザス・ロレーヌで使用されているのはアルザス・ロレーヌ語である。ドイツとフランスはこの戦争の反省からEUを結成し、欧州議会をアルザスの州都ストラスブールにおいた。いわばその前提であったフランス史・ドイツ史という「くくり」から歴史を解放したといえる。

一方、日本と朝鮮、中国との関係をみるならば、一国史を楯に対峙するかぎり領土問題が発生するのは当然と言えよう。国民国家日本も国民国家中国も国民国家韓国も、一九世紀から二〇世紀にかけて成立したことを考えれば、それ以前の帰属を問うことは意味がないことである。領土問題をそれ以前にさかのぼって問うところに混乱があるのだ。

おわりに

人類学、歴史学ではこの数十年、今までの常識が大きく変わるような発見がなされてきた。ところがその成果が歴史教育に生かされてきたかというところでもないのである。神奈川県では世界史教育推進委員会を中心とするメンバーが山川出版社から『世界史をどう教えるか』を出版したのは、この部分を埋めようという意図からであり、拙いながらも目に見えるかたちにしようとした。

歴史の研究者のほうからもこの動きに対しての応えがある。神奈

川の高校生に毎年授業実践をしている大阪大学の桃木至朗教授は『わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史』（大阪大学出版会）を出版された。高校の歴史教員に読んでほしい研究書であって、現在の研究動向を歴史教育に反映させようとする意欲作といえる。

時代遅れで誤った歴史を生徒に教える危うさにそろそろ気づいてほしいところである。いわゆる「歴史小説」に描かれている歴史は確かに歴史を身近なものにした点では評価すべきだが、実は本当の歴史とはかなり違う、ということをきちんと教えることが歴史教員のつとめであると思う。